

編者はしがき

本篇『宗教戯曲篇 耶蘇伝・釈迦と維摩詰・月愛三昧』は、本全集四十九、五十、五十一巻の三巻に渡って収録されている。

この宗教戯曲篇に収められている三篇は谷口雅春先生の創作であり、文学作品である。この三篇の戯曲には、イエス・キリストやイエスを裏切ったユダや釈迦や維摩詰が主人公として登場しているが、キリスト教の創始者イエス・キリストや仏教の始祖・釈迦の教えが、谷口雅春先生の「生命の実相」哲学の光に照らされて存分に説かれているが、同時にその宗教的真理を戯曲という文学形式の形を取って表現されている。

る。

そもそも文学とは何かを、谷口雅春先生は本書の序である「自然と生命と芸術」で述べられている。

「科学の如くには正確さのないと考えられているところの芸術の捉えた世界こそは、却って真実の世界なのである。それは「生命」を「生命」そのままの相で触れて捉え、「流動」を「流動」そのままの相に於て捉える。芸術は、一見そこに横たわっている「物質」をそのまま写生文学式に描写すると考えられる場合にしても、決して物質そのものが捉えられるのではなくて、その物質の与える感じが捉えられるのである。物質はただ、その背後にある『感じ』の代表者として、象徴として立つのである。(略)

桜の花が何元素で出来ているか、そんなことは問題ではない。桜の花をしてかく顕わしているところの生命の囁きを、作家は捉えて表現するのである。」(XV頁)

科学は対象を観測し、測定するに過ぎないが、文学は同じ物質を流動する生命と観て、生命が生命を観るのである、と谷口雅春先生は説かれるのである。

その文学観に立った谷口雅春先生の文学作品は、本編所収の戯曲の他にも童話の創作や「生命の實相」に収録されている「自伝篇」(新編「生命の實相」三十一―三十三卷)もそうである。もちろん、この「自伝篇」がフィクションだからという意味ではない。「自伝篇」に描かれている年代や事実関係、人間関係はすべて事実である。

しかし、谷口雅春先生のご幼少期から「生命の實相」の真理をお悟りになるまでの半生記の一つ一つの人生上の出来事、ご体験が谷口雅春先生のお悟りになった「生命の實相」の光に照らされて新たな真理の提示になっているとともに、それらの事実が谷口雅春先生の「生命」によって「一つ一つの人生上のご体験という流動する生命」として捉えられているという意味で文学作品となっているのである。

その創作と真理との関係を谷口雅春先生は次のように述べておられる。

「吾々は物質の世界において、物質なき世界に住み、ただ生命のみの世界、ただ生命の象徴のみの世界に住むのである。吾々は物質の大地を歩まず、生命の大地を歩む、見るもの聞くもの、そこに物質を見ず聞かず、生命の同胞の描いた絵を見、生命の同

胞の歌う歌を聞くのみである。生長の家の実相主義の文学はかくの如くして実相を捉え、その実相をかくの如くして象徴によって再現するのである。自分はともかくそういう態度で芸術を創作したのである」(XX―XXI頁)

谷口雅春先生が創始された「生命の實相」哲学の最大の特徴は、「物質は本来無であり、本当に実在するものは神のみである」という「縦の真理」と、その神が造り給うた実相世界の投影である現象界は神の心の投影と人間の迷いの心の投影とが交錯し、「心の法則によって展開する心の世界」であるとすると「横の真理」が説かれていることである。

そして、その「生命の實相」の真理を宣布する上で谷口雅春先生が取った画期的な方法が「文書による真理の宣布」であった。この「文書による伝道」に谷口雅春先生は生涯にわたって心血を注がれた。

谷口雅春先生は五十年以上にわたって月刊誌各誌に毎月執筆され、書籍も五百冊以上を出版されてきた。この布教方法は古今東西のいかなる宗教開祖も宗教教団も為し

得なかったことである。

そして、そのためにこそ神は谷口雅春先生に文章執筆の才能を与えられた。おそらく、宗教方面に進まなかったならば、谷口雅春先生は高名な文芸作家もしくは文筆家になっていただろうと思われる。

その恵まれた文学的才能によって「真理を説く文学作品」が次々と生まれた。それは戯曲や童話だけでなく、「神示を受くる迄」の「自伝篇」、さらに「甘露の法雨」「天使の言葉」「続々甘露の法雨」などの聖詩の数々、そして、三十三の神示、「生命の實相」「真理」等に代表されるすべての文章、それらすべてが「文学作品」である。

その文学作品にして真理の書である本篇の戯曲の「生命」を吾々読者の「生命」が受け止めれば、著者である谷口雅春先生の「生命」と吾々読者の「生命」との間に火花が散り、吾々の眼前に実相世界が現れ、吾々はその荘嚴な景色を垣間見ることができらるだろう。

本篇で語られるイエス・キリストの言葉と釈迦の言葉とは「生命の真相」の真理の

言葉であり、それに係わる人物達との対話が真理を一層引き立たせ、輝きを放っている。

それらの言葉を十分に楽しみ、堪能し、谷口雅春先生の創作された「文学作品」に親しんで頂ければ幸いである。

令和四年七月吉日

谷口雅春著作編纂委員会